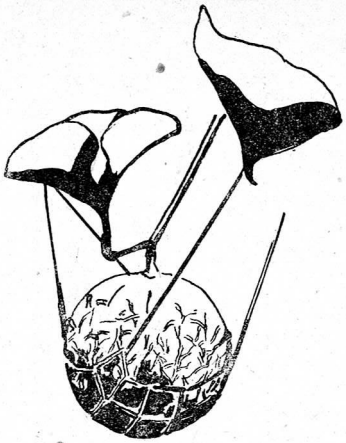


札幌市の青果物の動き

中原忠夫

道内の唯一の消費都市である札幌の青果物の実態を摑むという事は、これから作付を有利に進めて行く上において必要な事と思われる。併し乍ら札幌市にはまとまった市場がないため、却々その実態を摑むことはむずかしいようである。現在札幌には円山と白石に生産者の朝市が立てられていて時期的にはかなりの出荷量も見られるが、府県ものの移入は多く業者の手によってなされているばかりでなく、青果物の価格、出廻り状況によっては市内の業者との直接取引の行われる面もかなりの量に昇るものと見られるのが現状である。従ってこれ等を綜合した調査が望ましいのであるが、この調査資料は札幌地区青果物農協（円山朝市）にもとめ、同農協の岡本専務、若杉両氏の御指導を得て作成したものである。

この調査は飽く迄円山の朝市を通じて見た札幌市の青果物の動きで、全体の動きとは多少の喰違いもあろうかと思われる。唯残念な事には累年の統計がなく昭和三十年七月以降三十一年の二カ年しか見られなかつた事で年度差の追求等において少しもの足りなく感ずる点もあろうかと思われる。

表の見方

種類については取扱高の多い夏野菜と、品種は異るが出荷期の長い葉菜三点を選んで見た。大体果菜は八、九月に生産が集中しているものであるから五日、十日と細かく区切つて見た。葉菜は旬間に区切つて見た。表中五日の数量というのは一日から五日までの総扱高を示し、旬別になつているものはその旬間の総扱高を示している。平均価格の表わし方はその期間内の総売上金額を総取扱高で割つたものである。日々のセリによつて品質の良いもの、あるいは荷姿の良いものでかなり高値で取引されるものから、捨値で投売りされているものまで含まれている事は勿論である。

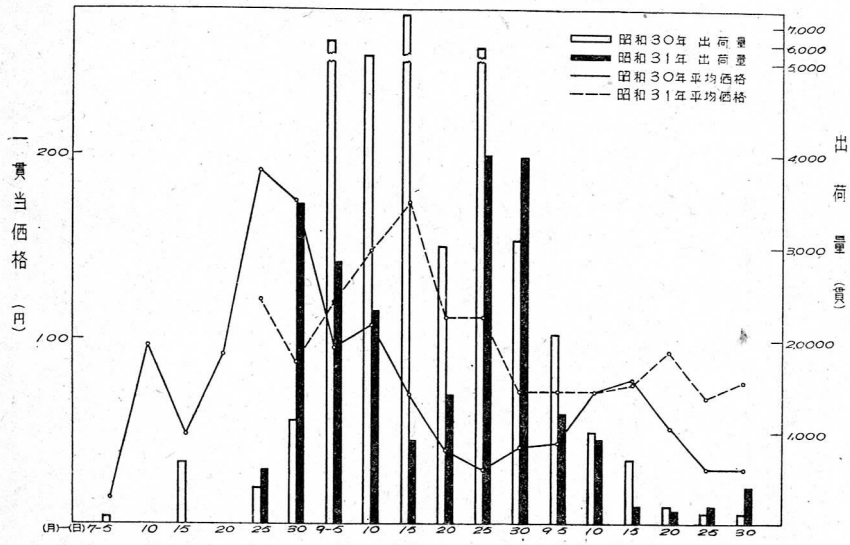
これ等の表を見て感ずることは、天候の影響に依る年度差も見られるが大体同様な曲線を示している。更に大都市といつて見ても人口五〇万位の為需要量に限界があり特に従来から夏出しのほうれん草、葱は有利とされているが、出荷量が少し多くなるとかなり値が下がつている。

果菜の大体の傾向としては、地場ものの出廻り始めはかなり有利に取引されていて、次いでお盆前と漬物時期の需要増で価格が例年伸びているようである。従来気候的に技術的に省りみられなかつた、早期出荷、いわゆる促成ものの価値について検討するのもこの表を作る目的の一つであつたが、唯この表だけを見ては見当はつかないと思う。更に今後共府県ものの移入状況と、消費量の点を掘り下げて行く必要があると思う。何れにしてもトマト等はクタビレタ移入ものより新鮮な地場ものの魅力が強いという事を市場の方々は強調しておられた。

（雪印種苗・上野幌育種場園芸作物主任）

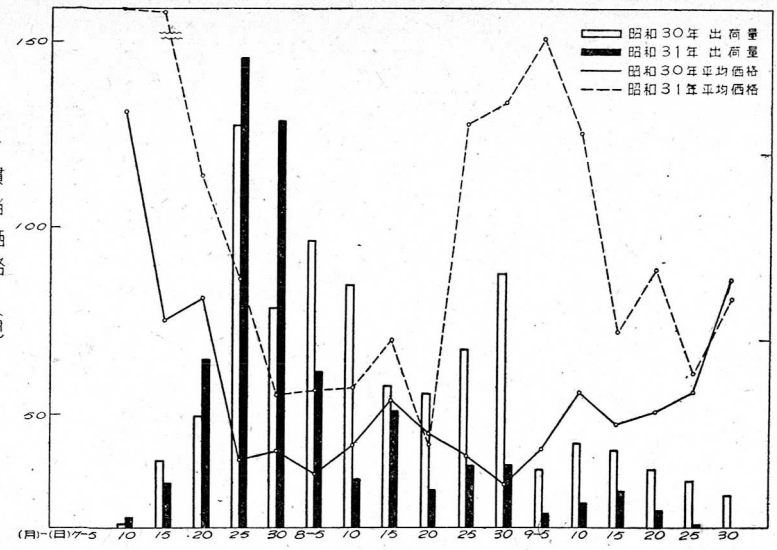
とまと

とまとの需要は年々伸びる傾向にあるといわれ、夏野菜として価格の点から見ても安定したものといえよう。札幌市周辺ではお盆頃の出荷集中を望むばかりでなく、少くとも九月一杯位出荷出来るよう肥培に努め総収穫量をあげる方が結果的に見て得策のように思われる。



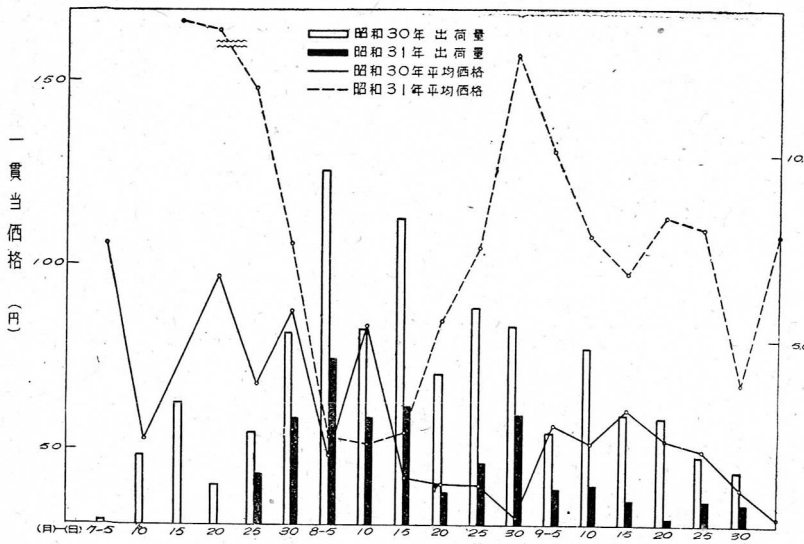
きうり

天候、病害虫の関係から出荷盛期は八月一杯で九月に入ると急減している。処が八月中の置漬は温度が高すぎて不適なので、九月に入ってからの需要は相当強いものがあって、とまとと同様九月下旬に至るまで長期に亘って出荷が望ましい。早朝出荷のみをねらうよりむしろ抑制栽培の技術を検討すべきであろう。



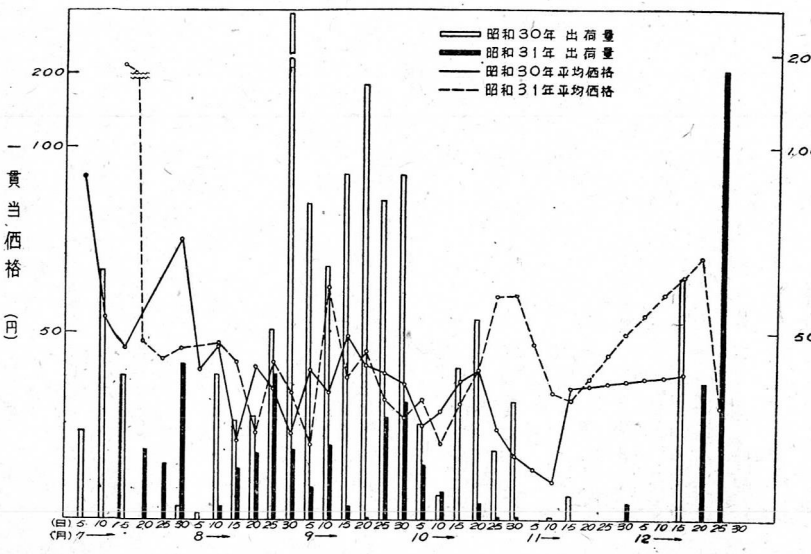
なす

なすは、天候による影響の最も大きいものの一つであろう。併し例年出荷最旺期の八月上中旬の需要は少なく、品質の良い物を除いては売足がにぶい。従って耐冷性のある極早生種を取り入れることが大切である。



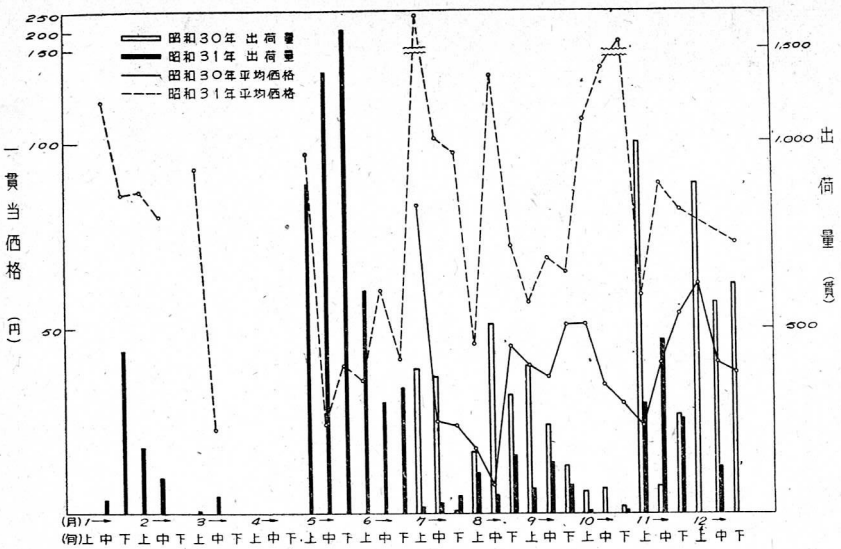
かぼちや

かぼちやの早出しは大体七月末から八月初旬まで需要の面からも大して期待出来ないだろう。むしろ九月中旬に質の良いものを出すようにした方が需要も相当あるので有利であろう。



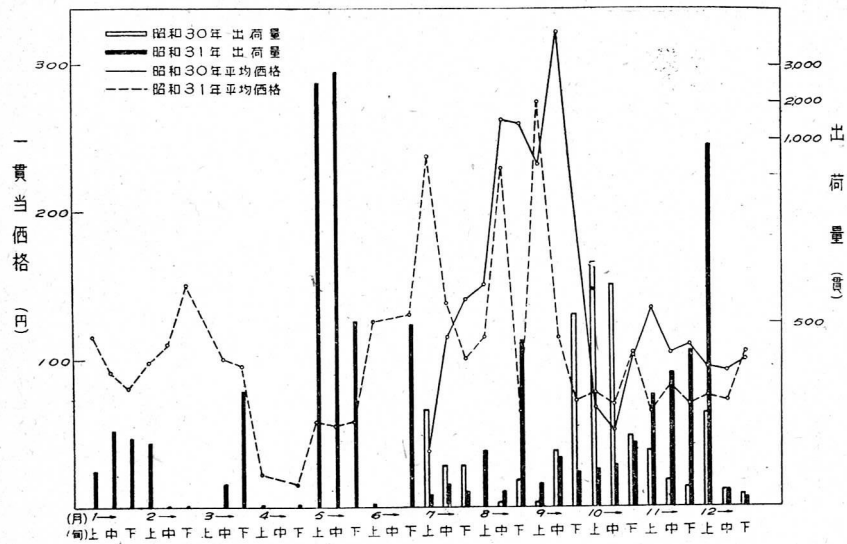
長　葱

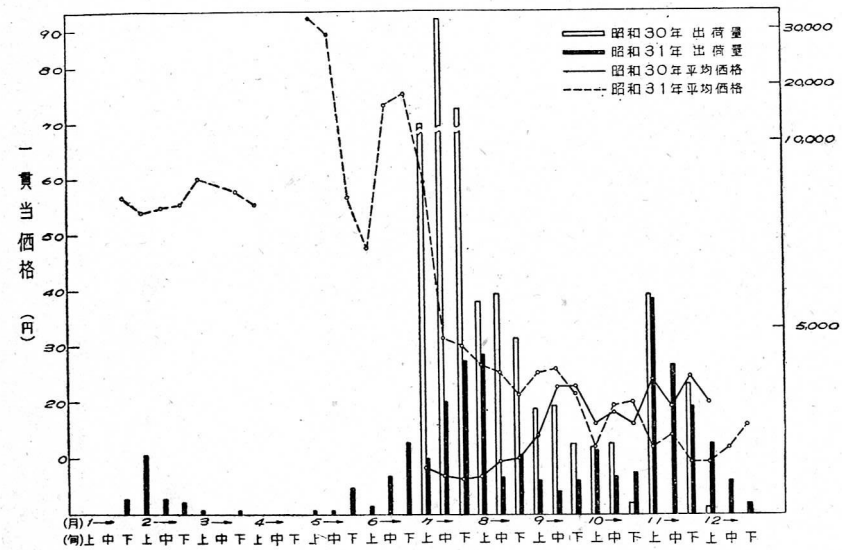
年度による価格差は甚しいが曲線は略同様の傾向をたどつている。二年葱による七月出荷と、一年葱の早出し、すなわち府県から入らない九月、十月の出荷を目指すべきで量的にもかなり伸びる可能性があろう。



ほうれんそう

ほうれんそうの出荷は何といつても七月からら九月までであつて、この時期は前にも述べたように出荷が少し多くなると安くなる事もあるが、如何にして高温期に質の良いものを作るかという事を更に研究すべきであろう。



かんらん

かんらんは労力も割合かからず、大抵の土地で作れるので、高値安値の相場が繰返されているから作付に当つてはこれ等の事情を十分研究してかかる必要があろう。